

偽りの鷹

セイ・アオク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校卒業翌日、大学準備を終え自宅で自分の大好きなゲームを楽しむ矢先に突如聞こえた声……

「集え、始まりのもとに……」

謎の声に導かれたコミ症気味な青年は果たしてどうなるのか。

波乱に満ちた旅路が今始まる

目次

プロローグ

始まりと鷹

1

竜宮島と鷹

6

通りすがりの鷹

15

第1章 始まり

先生（博士）と鷹

22

夢見と鷹と小さな巨人誕生

28

魔術と鷹：密かに忍

35

マジカライズ・イーグル

43

魂の鎧武者と傷だらけの鷹

59

訓練と新天地と絡まれる鷹

72

プロローグ 始まりと鷹

只今猛烈に困惑している。突然の出来事で未だに判断出来ないけど、取り敢えず今までの経緯を振り返ってみよう。

高校卒業した翌日、俺は自宅の部屋でのんびりしていた。大学の準備は済ませており、後はその日が来るまで気長にやるだけ……でも、何もやらないのは些か寂しくもあった。なので、毎度のルーチンワーク如くこのゲームを引き出しパッケージを出した。

俺にとって、大切なこの「スーパーロボット大戦W・K・L」の三シリーズ。DSに挿しては戦闘シーンとBGMを楽しみ、挿し入れ替えしては同じ事を繰り返して楽しんでいたが……いつもとは違う違和感を感じる。

突如機械からノイズ音がし故障か何かだと思った矢先、そのノイズ音から声が聞こえた気がした。

「つ……………ま……………に……」

「なんだ、この声……………このゲームには声は無かった筈だけど。まさか、故障とか爆発と

は……」

DS本体から聴こえる声は徐々に大きくハッキリになりつつある中、俺は逃げるべきか否かを考える。しかし、何故かその考えは消えて、この声を確かめたいという想いが強くなる。結果、逃げずその場に留まった……留まったが故に、今に至る原因だと確かだけどそれしかなかった…

「集え、始まりのもとにー」

次の瞬間、謎の声と共に眩い光に包まれてしまう。次に目を開くと、深い霧の中で椅子に座っていた。

「えっ、何が……？」

突然の事に理解が追いつかない。一旦、霧が晴れるまで椅子周辺を探索しようと考えながら、何故か上下左右ともに不自然な見えない壁や天井が存在していて、結局椅子から立ち上がれずに座ることしか出来なかった。この深い霧と視界が分からない状態に更には逃げ場のない。

「……………」

これだと、鳥籠の中いる気分でしかない。白が続くこの深い霧が余計に不安を増す

ばかり……霧さえ晴れば、この不安は少しは消えると思いたい。

そう思ったのが幸いしたのかは不明だけど、霧が徐々に晴れ周りが見えてくる。だけど、徐々に不安から焦りにへと変わっていった……

「これって……戦闘機、だよな？」

……本当に一体全体どうなってるんだろ？

軽い過去から今に戻り、何故壁や天井があつたのかがよく分かつた。そりゃ戦闘機に乗れば狭いのは当たり前だ。

戦闘機とは、漢字の如く戦いの為にある機械であり主に空を基本として空中戦闘する。地上に対して攻めやすく、軍事では重宝される。そんな機体に俺が乗れば違和感でしかない。

椅子に座つたまま、辺りの機械を触らず何があるのか調べる。沢山のパネルにコントローラーみたいな物、前にはモニターがあつて後ろにはもう一人乗れる椅子が少し見えた。

(ますます戦闘機ですね、ありがとうございます)

全く嬉しくない状況が続く中、今まで映らなかつたモニターにある言葉が映し出される。

「識別コード ヴァルホーク」

(戦闘機かと、散々思っていたけどWの主人公機かい!!)

嬉しさが込み上げるが不安感も出てくる。何故スーパーロボット大戦に出る機体に俺が乗ってるのか。それ以前にこの機体が実在していると仮定したとしたら、ここは……この世界はWの世界何だろうか？

軽めに解説だが、この機体は古代の人……というより、主人公の父親が作ったものなんだ。大きく省くけどWには前編と後編の二部になっていて、前編最後にて危機的状況の中、主人公を守ろうとした父親が遙か過去に行つて、自身が乗っていた機体や戦艦を一から手掛け未来にいる自分の家族に託したものが、この機体ヴァルホークなんだ。

輪廻や時間軸、パラドックスはどうなのかとか論理は難しいから置いとく。でも、これだけは分かる……凄いい父親だと思う。まあ色々種を蒔きまくるけどね。

「……どうしよう」

今はオートパイロットシステムでやっていて、今何処に向かっているのか全然分からな
い。モニターやガラス越しから外を見ても海が続くばかり。到着するまでは辛抱する
しかないのが現状だったりする。

もしも、Wの世界なら主人公にこの機体を返さないといけないし、元に帰る手段を考

えないといけない。まあ、あのモニターが嘘情報出した可能性もあるので案外気楽……には出来ないか。だって戦闘機には変わらないし、場合によっては国家にお世話になります!?!ルートになるかもしれない。

(どんなに考えてもギリ貧しくないのは絶望しか湧かないな……。一旦寝よう……。そうすればきつと大丈夫だと思っから)

そう思っ軽く睡眠に入る。

こんな夢など、現実にはない……。そうするしかなかつた。

竜宮島と鷹

眠りから覚めると、そこは…

「……浜辺？」

よく分からないが浜辺に倒れていたようだ。だが何故に浜辺にいるのか、それは簡単に想像がついてしまう。

(まさか、墜落でもしたのか…寝てる間に)

これが本当ならば「俺は死んでいたかもしれない」と思った瞬間、身体中から嫌な汗を掻き同時に寒気を感じてしまう。

「うう……」

今までの平凡な日常では、危険はあれど滅多に遭遇しない。こんな生死を分けるようなことなんて、事故や戦争が起きない限りそれはない。

「誰か……いませんか？」

その問いは誰も答えない、海の音と近くにある森からの動物の声しかない。だけど、その音が落ち着くには丁度良かったのかもしれないが、自分が落ち着く中で少しずつ別の問題大きくなっていく。

「…オワツタ」

早くもヴァルホーク損失・撃墜疑惑、そんな噂がもし主人公や家族にバレたら…

(仏の顔も三度までだから…きつと)

主人公がいる家族は皆ユニークで温かく皆優しいのだが、何時も金欠に再悩まれている。それ故に金が関わりと…みたいなイメージが今もある。まあ父親の方針であり現実はそのと大差ないから納得出来る。

(不時着しているなら近くにある筈、海に沈むのだけは御勘弁だよ)

近くにある森に入り進んでいくが森が続くばかり。人が入った形跡もなく、動物達の足跡が残っているだけ。方角を調べようにも方位磁針も無い…他にやり方があるけどあまり覚えてないので難しい。

(島だから歩き続ければいつか見えてくる…よね?)

そう希望を抱きながら前に進むんで行くと、途端に虫や動物の音がしなくなり目の前には洞窟がそこにあった。だけど、その洞窟は人の手が加えており鉄の板で蓋を閉めていた。

「人工物の扉?」

軽く触れてみるが何も変動も起きない。

当然の結果過ぎて悲しくはあるけど、これがあるなら近くに街があるという希望もある。

「……………さよなら」

もしかしたら迷惑が起きてるかもしれないのでとりあえず一言。別に違反や私有地侵入の可能性を気にして言った訳ではない断じて。

後ろを向き立ち去ろうとしたその時、何処からともなく声が聞こえた。

(…あの時の声ではないけど、何で皆やまびこみたいに声出せるのだろうか。滑舌や声の高さや質なのか?)

「……………来て」

天からの声により徐々に洞窟の嚴重な扉は開かれる。呼ばれた以上答えなければ危うのは目に見える。

(この扉は音声対応型だったのか…ハイテクだな)

なんて思いながらも洞窟を進んでいく。最深部に向かう中、機械的になる洞窟と空気が何か違うような気にしたが、頭の隅に置くことにし歩く続けるとまた扉が先に進むと…

「凄いな……………これ」

扉の先には空間があり中央には何か光るものがあるように見えた。近くに向かうと

そこには少女がいたのだが…

(カプセル型みたいだけど…ん？はっはだ！)

直ぐさまカプセル型から離れ少女の顔が見える辺りに下がるが、少女に対して失礼極まりないことをしてしまった。だが何でこんな所にいるのだろうか…特殊な病院なのか。

(それに、あの顔何処かで見たような気がする…)

それにしても、此処に来てから声は聞こえないけど一体何が…。ともかく、素肌を見えないように少女に向かってコミ症ながら話し掛けてみる…

「戦闘機…見た？」

返事が返ってくることは当然なく静けさだけ。諦めて来た道をもどろうとすると声が聞こえた…しかし先程とは違い小さく声が。

「フェストウムが…この場所…」

返ってきたのは質問とは違った言葉、それと同時に来た道の扉も開くが今重大な事が分かった。あの言葉でだいたい分かるが同時に意味不明でもある。

(Wかと思ったら、Kだった件について。まさか、混合作品か何か?)

色々混乱する中、とりあえず洞窟から出て判断しようと思ったが気になることが二つ。

(フェストウムだとしたら此処は竜宮島？ それにフェストウムとは和解出来てない時なんだろうか……)

.....

一方フェストウム襲来した現場は……

「……つたく！楽園観光じゃなかったのかよ！」

「観光じゃなくて、視察の護衛任務でしょ！」

この二人はザフトのエースパイロットであるシンとルナマリア。だが何故此処にいるのかはオーブ軍リーダーであるカガリ・ユラ・アスハを護衛兼視察の為此処にきていた。

「どつちにしろ、アレを墮とせばいいんだろう!! 行くぞ、ルナ！」

シンが乗るデステイニーガンダムはフェストウムに対して攻撃を仕掛けるもことごとく外す。

「!? 命中しない……! 攻撃が読まれてるのか!？」

「……そこにいますか？」

「!? な、なに……この声？」

「あなたは、そこにいますか…?」

「言葉…!? こ、これは…!」

フェストウムからの突然の言葉に二人は怯んだると回線から別の声が聞こえる。

「答えるな! ヤツに思考を侵食されるぞ!」

「な、なんだと…!?」

「シン! ルナマリア! 相手は読心能力を持っている! ヘタな攻撃は消耗するだけ

だぞ!」

そう、それ故に通常機体やパイロットでは歯が立たずフェストウムに侵食され同化される。人類から敵視される危険度が極めて高い生命体だ。

「クツ…! なら、全力で行くまでだ!」

「ルナ、援護を頼む!」

「わ、わかったわ!」

相手は一体でありながら、その読心能力で二人を翻弄する。大抵攻撃が外れるが、二人は焦りはあれど迷いはなかった。信頼出来るからこそそのコンビネーション攻撃をし、徐々ではあるがフェストウムにダメージを与えるが確実にシン達は追い詰められつつあった。

その様子を見ていたアルヴィスにいる者達は切り札を使おうとしていた。

「ファフナー」そして「ジークフリード・システム」を…

どちらも、フェストウムに対抗する為の武器であり最終手段である。ファフナーは島の守神と言われており、ジークフリード・システムはフェストウムの思考読みを無効にすることが出来る。

その状況を見て、カガリは部下のアレックスに命令を出す。

「アレックス、”彼ら”にコンタクトを取ってくれ…」

シン達は戦況をどうにかする為戦い続けるが乏しい状態。ゲステイニーもインパルスも最大限に発揮出来てない今、厳しいと誰にでも分かっってしまう。そんな中、新たな機影が現れる。

「!? あれは…!」

「あれがファフナー…伝説の名を冠する巨人か!」

ファフナーの登場に戦局は変わるかと思われたが、パイロットである一騎はまだ初心者であり行動速度は低い。どうにか動きをするが相手は待つてくれない。

「…!? う、うわあああああ!」

「…!?」

咄嗟に近距離武器を出したファフナーにフェストウムは攻撃を加える。それが呼び水となつて新たなフェストウムグレンデル型六体現れ、更に戦況は激戦となつていく。

シンやルナマリアが先行して、出てきたばかりのグレンデル型を殲滅しつつもファフナーに気にしながら戦う。対して一騎は目の前のフェストウム一体が手一杯だった。ジークフリード・システムのお陰で思考は読まれにくいだが戦闘技術は無いに等しい。

その中でフェストウムを追い詰めたその時、フェストウムはファフナーを同化しようするが、直ぐさまシンがカバーに入るも逆に同化されようとしていたその時：

「一騎！レールガンを使い！」

「!?総士のお父さん!?!」

総士の父親はファフナーの武器がある格納庫から直接武器を射出するが同時にフェストウムからの反撃を受けてしまう。

射出された武器レールガンは無事届きフェストウムに大打撃を与えるがまだ倒しきれなかった。それどころか急にファフナーが動けなくなり万事休すかと思われた。

「…!?!」

「(、これは…!?!)」

突然現れた戦闘機の攻撃にフェストウムは怯む。更に戦闘機は残っていたグレンデル型を殲滅する。残りはこの一体のみ。

「一気に決めるぞ。ヘル・ストリンガーを使う！」

「!? しかし、あれは…!?!」

「相手はフェストウムだ。分かっているな…?」

「…了解しました。レプトン・ベクトラー、同期臨界開始!」

「シンクロ係数97、98…圧力固定、セーフティロック解除! 食らいやがれッ!」

まさに圧巻、その場にいたメンバーは驚きしかなかった。あのフェストウムを一撃で葬る力が…だが。

「ターゲットの消失を確認。レプトン・ベクトラー、出力安定。こ、これは少佐…!」

「はあ、はあ、ま、まだいたのか。うう…」

「し、少佐!」

先程の攻撃で動きが鈍くなった機体対し、フェストウムが攻撃しようとしたその時突如蒼き閃光が横切りフェストウムは倒された。

「な、なんだ!?!」

「あれは一体?」

一同混乱する中一人だけ反応が異なっていた…。

「や、やっと、現れたか…蒼き翼、可能性よ!」

通りすがりの鷹

結局、あの洞窟にいた少女は誰のか分からないまま、来た道に戻ることになったが分かったことがある。

フェストウム：たしかKに出ていた敵の名前で、ファフナーを操る少年達が戦うんだよな。何かと悲惨な記憶しかないけど、それだけフェストウムが脅威なんだよね。実際プレイしていてあの能力が強くて、ガンダムといった回避や命中が高い機体じゃないと敵しい局面があつたりね。

この世界がKだとしたら、大変面倒なタイミングに遭遇したことになる訳で…。戦争やフェストウムといった吸収生命体に侵略宇宙人、更にはもう一つの地球もあつて問題だらけしかない。まあWやLも大概だから危険には変わらないけど。

今外出たらフェストウムだらけの戦場だとしたら、俺の知る流れでいくならガイキングや他のパイロット達がいたと思う。だけどその前にファフナー組の少女が自爆するイベントが……つてどのタイミングだったっけ？

「思い出せば……な」

もしタイミングが分かるなら救う事も出来る……わけないか。もし自分が行つたと

して、結末が変わる保証など微塵もない。逆に更なる最悪な可能性もあるかもしれない。一人、救い出せるビジョンをイメージするが全然出来なく、結局洞窟の出入り口の光が見えてしまった。

決め手になる記憶を思い出せないのと、経験の無い現実という板挟みに逢いながら歩みを進める。そして、洞窟から出た先は案の定戦場になっていたが……目の前に広がる戦況と記憶とは明らかに異なっていた。

(何でデイスティニーガンダムとインパルスガンダムがいるんだ?)

本来ならまだ登場しないシン・アスカの後継機であるデイスティニーガンダム。インパルスの方はまだ納得は出来なくもないが、そうなると時系列が滅茶滅茶になる訳で……

(一旦安全な場所探そう……)

どんな戦場になろうとも、力の無い只の一般人が解決出来る筈もないし、もし仮に持つていても戦闘技術も微塵もない自分なんて瞬殺されるのが目に浮かぶ。だから、出来るだけ安全な場所を探すしかない。因みに、あの洞窟は既に入り口が閉まっていて引き返すのは無理だったり。

何処かに隠れられる場所を探す為に山道を走る。空は爆発や機銃の音が広がり危機感が増していく。焦りから走る速度を早めた時、急に足場が無くなり浮遊感が……身体

中に冷や汗を流す。

(何で穴が…!?)

穴に落ち、そこから急な坂を転がり続ける自分は正に転がるおにぎりの気分を味わう。目が回り気持ち悪さを覚えるが、次第に坂は緩やかになっていく。転がりが終わる色々と気分が下落気味になるが、今はそんな悠長に構えてられない。幸い軽傷は無いので、ふらふらな身体を押しして周辺を見渡すと目の前に広がる光景が目に入る。

周りの木々は倒されており此処一帯が大きなクレーターが出来ている。中央にある何かが原因で起きたのは分かる、が果たして一体誰がやったのか分からない。少しずつ前に進み正体を見る…

「ヴァル…：ホーク？」

設定資料で見たことがある戦闘機があった。でも、まだ確証もなく不確かなので呼び掛けてみる。すると、それに応えるかのようにハッチが開くではないか…：

(実際初めてみるよな…：外からだとき。乗ってみれば、あの時と同じ機内の筈)

色々と感傷深い部分もあるけど、今は戦闘の真っ只中でありこの機体に乗れば多少だが安全でもある。ヴァルホークの1番前に乗ると、ハッチが自動的に閉まりモニターに文字が出る。

「敵反応の為、オートパイロットモード継続中。更にパイロット名の確認の為、音声確

認めますので名前を言ってください」

オートパイロットについては置いといて名前か……。Wの主人公名で良いのだろうか？

「アーディガン カズマ……で良いかな？」

「誠に申し訳ないのですが、その名前では認証しかねます。正しい貴方様の名前を御願ひ申し上げます。注意事項とし再度間違つた場合は乗機剥奪なので悪しからず」

駄目らしい。更には次やつたら乗せないぞ、と脅しもしているこのモニターは正に悪魔？いや当たり前なのか……セキリティーからしたら。さて、俺のいつも使っている名前で行こう。それで違つたらもう知らないぞ……

「俺の名前は……カズマ」

そう、主人公と同じ名前だったりするが偶々だ。苗字は……何でか思い出せないのが腑に落ちないが後回しにする。

「名前及び音声認証確認、これより貴方様が呼べば、随時その場に來ますので場所や周りには注意して下さい。尚機体につきましては、停泊した場所から動きませんので、呼ばない限りはその場にあると思つて下さい」

認められたのは良いけど、機体名呼んだだけで来るのか……。あまり口には出さない方が良くも知れない。

「尚ガイド案内はここまでとし、緊急時以外は基本貴方様に委ねますので。操作方法はモニターや右横にあるマニュアル本から出来ます。慣れましたら、モニターから戦闘シミュレート出来ますので暇な時に頑張つて下さい。では……集うその日まで」

「おつ、おい嘘だろ!?!」

まさかの後は頑張つてね方式にされるとは……とにかく、モニターとマニュアル本でどうにかするしかないのか。

「まずはオートパイロットモードを解除して、次に右ペダル踏みながらギアを切り替えれば変形に切り替わるっと……あれ?」

右ペダルを踏み機体が上昇し前に進む中、ギアで変形は出来たが機体のスピードが上がっていく。

「えくと、スピード止めるには、左ペダルを押してホイールを確認後、左右のレバーを……やること多過ぎだろ!!」

(とにかく、やるしかない……止まれよ!)

ほぼ勢い任せながら、書いてある方法に沿っていくが大体の単語が訳が分からないが”何となく”やっっていく。

(止まれ……止まってくれ!)

スピードは段々と落ちてやっとならなくなったが、止まった場合には倉庫……基地みたいな建

物が目の前にある。急いで逃げようとする、今度はアラームが鳴り響き同時にモニターに言葉が出る。

「南南東から攻撃あり、ガード推奨」

「南南東って!?! それにガードなら確か…あった!! この盾なら!!」

先程マニュアル本に書かれていた盾を出し、モニターにある方位に機体を向け盾を構える。次の瞬間大きな振動が彼に襲う中、背後にある建物からミサイルが飛ぶ。

「いつ……ってえー!!」

（振動でもこれって……どんだけだよ!! 早く逃げないとな）

背後で何か騒いでるが、今の俺には無関係なものだ…一般人だもの。機体を歩行型から飛行型変形し飛び立つが、行き先に注意してなかった。

（なんとかなかったか……ってまたアラートかよ!!）

再度アラートが鳴り、モニターにある言葉が出る。

「ヒートエッジエクスポイダー推奨、加速上昇必要あり」

聞き覚えがある名前が出るが、今はモニターに出ているスピードが必要みたいだ。止めた時の手順を逆にすればどうにかなると勝手ながら思う。

「これで……うう!!」

急激な加速が入り、Gが身体に襲い掛かる。後ろにずっと押される感覚は、壁ドンす

る男が何人も重なっている感じ：いやジェットコースターだよなこれ。

そして、いつの間にかフェストウムを倒した、というよりは事故に近いような。周りから通話が出てくるが対応したらどうなるか分からないので：

(逃げれば勝ちの精神でその場を後にする。怖いものから逃げるのは恥ずかしくない)
そう自身に言い聞かす自分がそこにいた。

それから三日後、俺はデントン博士の助手になっていた。

(人生って、何だろう?)

第1章 始まり

先生（博士）と鷹

あの後島から逃げた俺は、目指す場所を決めれず只東に進んでいった。追われるかと思っただけ追尾する機影がないので、一時的だが安全を確保出来たが問題はまだある。

食糧がなく空腹が続いていた。機体には食糧や水もなく、案の定目眩が感じられ気持ち悪さが止めどなく出てくる始末。仕方がなかったので、モニターにあるレーダーを見て、近くにある島を調べると案外直ぐそこにあつた。

（この島……というよりは大陸だよな。この大きさからしてアメリカといった外国になるよな）

ここで重大な事がある。それは言語が通用出来るかどうかだ。通用出来る出来ない次第では随分と勝つてが違う。俺が言えるのは日本語とあやふやな英語だけ……それ以外の言語は知らない状況。

だが、奇跡的にこの世界は俺のいた”常識（世界）”ではない。つまりはゲームという基礎があるなら言語は”大抵統一”される。そうじゃないとそれぞれに住むプレイヤーが物語を楽しめないからだ。他にも他作品とコラボやクロスする場合にも

通する。

……まあメタいかもしれないが、客観的にそう願うしかない。天才や覚えの良い方々と比べ、自分は悲しい程に平凡なんだ。

(とにかく、降りるにしても着陸に適している場所を探して、機体を隠さない……一応お尋ね者だからな)

機体を隠せるスペースがある山岳地帯にある谷に隠し、空にいた時に見た街に向かうが色々と身体は限界に近づく……。街に続く街道に出た時には意識が朦朧する中背後から声を掛けられる。

「君、ちよつと良いかな？　ここらであまり見かけない顔だけど、迷子でもなつて……つて大丈夫かい!？」

声を掛けられ油断からか、それとも言語が分かる事に安心したのかは分からない。が、そこで糸が途切れたかのようにその場で倒れてしまうのだった。

……………

彼と出会ったのは、機材を買いに隣街からセンターシティに戻る途中だったかな？。最初青年が道端でゆらゆらと揺れながら、足元が疎かそうに歩いていてね。あの状況からの推測だったが迷子か酒に酔ったかの二択。一応話掛けてみる事にして、もし酒で酔っていたら……

「若者が酒なんて早過ぎる!! 私が叩き直してあげよう!!」

とか怒る気でしたんだが、まさか話掛けただけで倒れるとはね…。

（やはり酒で酔い潰れていたのか？）

と思っていたんだが彼から大きな音がしてね。確認の為に近付いてみたら……なんとお腹が減り過ぎてた音だったんだ!

いや〜私も長年生きていて、初めて聞いたよあんな…あんな……ね？

「は〜か〜せ〜?!」

「いやいや、済まないね。今も思い出しただけで、こんな笑える話なんだから良いんじゃないかね? 笑いのセンスバッチリだよ」

「そんなセンスいりませんし、アレでも生死の狭間に陥っていたんですよ!」

「そう言う割に、料理で目が覚めるのは精神が凶太い……いや野生っぽいじゃないかね? それに何時になったら先生と呼んでくれるかな?」

「俺は野生児じゃないし、博士は博士です。先生なんて呼ぶつもりは微塵もないですよ」

「それは残念だ、まあ口調が君らしくなってきたから成果あり…かな?」

「知りませんよ……冷蔵庫にある材料少ないんで、俺買物に行きますね?」

「もう少しなくなったのか。行ってらっしゃい カズマ」

「……いつ、行つてきます」

彼の背中を見送り私は研究室に戻る。だがカズマと出会ってこの生活も随分変わったものだ。

彼と出会ったあの日、道端に放置も忍びないので家にあるソファに寝かしたんだ。勿論もし目覚めたら即刻帰るように推進するつもりだったさ……最初はね。

まあ彼を横にした後、小腹が空いたので料理を作っていたら、隣から物凄い視線を感じて右に振り向くと彼がいたんだ……膵臓がエライことになっていて、今思い出してもトラウマに近いかもしれないね。

結局、私が食べる料理は彼の胃の中へ消えていき、もう腹は満腹かと思ったがまだ腹が鳴る始末……結果冷蔵庫の食べ物ほぼ消化することに。やっと彼が満足そうになったので、話を聞こうと思つたら……

「……………」

沈黙したまま彼の視線は右往左往するだけ。仕方がないので紙に書いてみることを推奨して書かせるが……

「ア……………」

字が小さ過ぎてが一部しか読めなかつた程だった。これではコミニケーションのことも出来てない。彼から話を聞く為に、時間を掛ける羽目になったが何とか状況が見えて

きた。

「つまり自分が何でここににいるのか分からず、当てもなく歩いていたら、お腹が空いて近くに見えた街に続く道に沿って歩いていたら…」

彼から話を聞くだけで約一時間は掛かるとは思いもしなかったが。ともあれ事情は大体分かったがやつかいな事案でもある。

（自分が何でここににいるのかを知らないとは。記憶喪失ではなく何か別の要因…つまりは何かしらの糸があるに違いないが分からない…か）

それにしてもよくここまで来たものだ。知らない土地に来たら混乱して正しい判断もつかない状況なのに落ち着い…いや混乱しているんだろう。あんなクールっぽく見えても中では乱れているに違いない。

「分かった、ならばこの私に任せなさい。それに君には行く目的もなければ、帰る場所も分からない状態で帰すのは危険だ。君自身がよく分かっているとと思うがそれで良いかね?」

先に私が手を前に出し交友の儀…つまりは握手を示す。彼は迷いながらも意を決して手を握ってくれた。

「ではこれから宜しく頼むよ。私の名前はデントン 君は?」

「……かつ、カズマと言います。宜しく…」

これがカズマとの馴れ初めかな。

色々と問題があるがいくつかは解消しつつある。まずはコミュニケーション能力だが、少しずつではあるが解消しつつあるかもしれない。彼の場合、単純に話好きなんだと思うが相手がいなかったのが致命的になったようだ。慣れと余裕さえ出れば彼らしい一面が出るはずだ…。

次に元々いた場所については結局分からなかった。これについては後回しにするしか現状出来ない。

今カズマの現状は、私の補佐を務めている。これは単純に家にいるのに居候はさせない為だったりするがね。

そして遂に今日私の悲願は達成されるが、この研究は間違っていたことを知らずにいた。

夢見と鷹と小さな巨人誕生

何もない黒く塗り潰された空間で、ポツンと一人自分が漂っていた。何も考えず、何も行動もなくその場に漂うだけ。

(そういえば、自分は何してるんだろう。確か、自分は……なんだっけ？ 苦しかったような気がする)

記憶があやふやで、何で自身がどうやってこの場所に来たのかが分からない。だけのあゝの苦しきから、解放されたのなら良かったのかも知れない。漂っていれば何も変化は起きない……

「集え、始まりのもとにー」

聞いたようなフレーズが響き渡る。この言葉が自分を……俺をあの世界に導いた。記憶が思い出していく中、空間は白と黒と青の三色が入り混じった空間になる。

夢なのか天国や地獄かは分からない。だけど、問わないといけない気がするが、何故か口が開かず話し掛けることは出来ずにいた。その中で声は語り始めるが、女の声ではなく男の声になる。

「始まりと終わり、創造と破壊、全ての輪廻はこれをを繰り返す。だが、ある一部を除

いた者が変革を及ぼそうと行動するが……何も変えられなかった。結局は” 思い出
” になり、また分岐点に戻るが周りの当事者達は何も気付かずにいる。そして、一部
の存在達は抗い続け繰り返す。神の仕組みを変革するには元々の可能性だと難しいが
……” 本来存在しない者 ” と数多の可能性を結集すれば変えられるかもな」
語った言葉が何の意味をしているかが分からない。意味のない言葉をずらずらと並べ
ただけかもしれないが、何故か聞き耳を立ててしまう。

「可能性………勇氣………神を………ヴァル………」

次第に言葉が聞こえなくなっていく意識が覚めた時には、目の前に怯えた様子で此方
を見ているこの人、デントン博士との初対面した。

最初はコミ症な自分に対して、心身に接してくれるこの人がとても嬉しかった。この
世界で初めての人でもあるけど、何よりちゃんと接してくれる人は……この人とじい
ちやんだだけだった。周りは結局上っ面だけで仕事だから仕方がないから、とやってる奴
しかいなかった。だからこそ、嬉しかったし慣れるまでそんな時間は掛からなかった。

デントン博士以外にも話相手は出来た。名前はジョーイとサイ、二人共博士が勤務す
る学校の教え子で、手伝いする最中で俺と知り合った。因みにだが、デントン博士は学
校だと先生や教授と呼ばれているみたい。俺は場合、最初の印象で博士と呼んでるけど
ね……。

博士から呼ばれて知り合った時に君付したら、二人共呼び捨てで良いと言われたので今に至る。同時に博士から俺の事を助手という肩書きにして二人が疑問持つ前に納得させた。他にも色々ゴタゴタがあつたけど…。

ともかく、今は買い出しに行かなくては!! 今日晩御飯はハンバーグと久々の白米だ。

(まってる白米!! 今 君の元へ!!)

.....

僕には最近知り合ったお兄さんがいる。

初めて会ったのは、学校友達リナに買い物荷物運びをされていた時だったっけ…。両手に大量の荷物持っている僕と楽しそうに目の前を歩くりナがいて、そんな時に突然背後から暴走したクルマが来て周りの人は逃げ惑う中、僕もリナも突然の事でその場から逃げれずにただ立ち尽くしていたんだ…。あの時は突然の事で混乱したのもあるけど、迫る死の恐怖で身体が固まったんだと今は思うんだ。

そんな時、横から誰かが僕とリナを担いでその場から助けてくれたのがあのお兄さんなんだ。

結局、この事件は軽症者は多数いたけど誰も死ななくて良かったと思うし下手したら大惨事だったかも知れないから。僕もリナも怪我は無く服が汚れた程度で済んだのは奇跡なのかな…。

その後、僕もリナもお兄さんに感謝して名前聞いたんだけど何も答えずにその場から離れて行った。あの人は僕達にとって紛れもないヒーローであるのは間違いないから……。

また逢いたいと思ったけど居場所が分からなかった。だけど再会は奇遇で、友人のサイと一緒にデントン先生の手伝いで先生の自宅に行ったらあのお兄さんと再開を果たした。そこで自己紹介をして、愛称でカズ兄と呼んでるんだ。僕には姉さんがいるけど、兄が欲しかったのもあってそう呼んでいる……勿論カズ兄から許可は得ている。

翌日リナに連絡して待ち合わせ場所再会したんだけど、まさかりナのお兄さんウイルがいた。勿論リナはいたけど何でこうなったか聞いたら、リナが僕に会うと言ったら付いてきたそうだ。

僕とウイルの中は良くなり、会う度に暴言を言つてその仲裁でリナやサイが入る。だけどサイはいないけど何時もと違うメンバーが一人いる…。

「お前は何でまたリナを誘った？ そのせいでリナは大怪我しそうになったんだぞ!!

「そつ、それは……」

「リナの周りをウロチヨロするだけの迷惑じゃ飽き足らずに、今度は事故に巻き込ませようとしたのか!」

「お兄ちゃんやめて! あの時、私から誘っただけで……それにあの事件は偶々……」

「リナは黙ってる! 偶々だろうが何だろうが、この役立たずがいたから起きたんだ!」
「ウイルが僕に向かって拳を振り落とそうと見えて、直ぐさま目を閉じるが痛みがこない……。目を少しずつ開けるとウイルの拳を止めているカズ兄が立っていた。」

「誰かは知らんが、俺の邪魔は……」

「ウイル!! カズ兄は僕とリナを救ってくれた命の恩人だよ!!」

「お兄ちゃん!! ジョーイの言っているのは本当よ!!」

「なつ、なん……だど!」

僕とリナの言葉にウイルは釈然と立ち尽くした。先程までの威勢はなくなり、無言でカズ兄を見つめカズ兄は何も言わずただ見つめ返す。

「すまなかつた……」

ただ一言、ウイルは言いその場を後にするのを僕は見ることにしか出来なかつた。

他にも話はあるけど、カズ兄は何時も無言だけで行動力が凄い人だと思う。性格はクールだけど熱血みたいな感じかな? 僕はそんなヒーローになれたら良いな……。

「あつ、こんなゴミ箱にラジコンロボットが捨てられている。直したら動きそうだし持って帰ろう。このロボットの名前は……」

.....

「買いた物が終わったし博士の所に戻るか……って何だアレ？」

遠くで空飛ぶロボットが二体が、何かと戦っているように見えるけどあの周辺って確か……

（博士の自宅がある周辺じゃないか!! 急いで戻らないと……）

博士から借りたママチャリに乗って急いで戻る中、その道中で変な人間っぽい存在だとを見かける。

（虫の鎧を付けた人？ それに銃を持つてるな……隠れながら博士の所に向かおう）

あの虫人間の視野に入らないように動きながら観察するが、あの二体のロボットと虫人間は対立してるみたいだ。それに他に戦って……

「じよ、ジョーイが戦っている？ それに隣の白いロボットは一体？」

白いロボットは虫人間に攻撃し、相手の攻撃から瞬時にロボットに近づいてジョーイの右腕にあるコンソールっぽい物でバリアを出して守る……

(オカシイナ……Kだと割り切れたのに、今度はLのイクサーがいる。　　ジョーイって女の子っぽいからイクサーなの？　　Wのテツカマンやオーガンではないと思うから、……やっぱイクサー?)

軽く混乱する中、戦闘はいつの間にか終わっており二体のロボットの姿を消していたが空には大型空母が街中央に浮いていた。安全を確かめ博士達がいる場所に向かおうとするが、突然頭から声が聞こえた。

「汝、余の手元へ」

謎の声を聞いた瞬間に俺は意識を奪われた…。

魔術と鷹……密かに忍

漆黒に染まり静けさだけが広がる空間、足場もない所に浮く二つの影があった。一つは背が高く形から男性を思わせ、もう片方は背が低く少女のような形をしている。二つの影は目の前にある浮くものに対し話している。

「マスター、何故この者を招き入れたんですか？」

「何、ただの気まぐれよ。この者から何かしらの力を感じたが……間違いだつたようだが……」

魔導書 アル・アジフを” 同じように ” 追い詰め、大十字 九郎に必然的に再会……出逢いをさせ、後はあの場所で最初の戦いを待つのみ。だったが、今までに感じた事のない” 何か ” が地球に現れた。そこで魔術で分身体を出し、本体は魔導書に行き分身体は気になる存在に向かった。そこにいた地に這う虫けらを招き入れたが間違いだつたのだろうか？

「……ん？」

気を失った者が目を覚ましたようだが、果たして隠されし力を持っているのか否か。

「マスター……」

「ああ、目を覚ましたか？」

「……………」

本来なら感情を表し不安や寂しさといった感情を示す筈だが、この者は無感情に見える。顔で判断したのではなく、魔術で相手の心を見た結果である。殆どの虫けらや大十字九郎らを比べても異質な程にだが、環境や何かしらで至ったのならば納得もいく。

「虫けらよ、貴殿は何者だ？」

「……………」

何も、答えぬか……。余の魔力を出し質問した筈だが……他とはやはり異質よ。

「マスター、もう消しても……」

「待て、エセルドレーダ。身勝手な行動は許さんぞ？」

「は、はい……」

戯れに付き合う程、余は暇ではない。だが、気になるものがあれば探求してしまうのは仕方がないことであり、決して誰にも邪魔はさせせん。

「もう一度問おう、貴様は何も……」

「ハンバーグ……」

「ふむ、ハンバーグと申すか？」

名前とは世界に向けて自身の存在を示す鍵になる。名前を洋風アレンジする者や

逆も然りいたが……まさか食べ物の名を自身の名にするとは。この虫けらの肉親は噁かし異質だったのだろう。

「……フツ」

意外過ぎる名に、普段無表情のエセルドレーダすら微笑みを出すとは……面白く可笑しな奴よ。違和感が何かは分からないが、今“本体と大十字九郎ら”が戦う戦場に送れば見えてくるか或いは……

だが、単純に送るだけでは面白くない。ならば一つ問いを残そう。誰もが持つ矛盾にあるコレが、ハンバーグにある何かしらの機転になり、いつかは余の時間を面白みも増すであろう。

「ハンバーグよ、貴様にとって戦いとは何だ？」

ハンバーグの足元に魔法陣を展開させ問い掛けた後に転送をした。エセルドレーダは何も言わなかったが分かっているのだろう。余の永遠に繰り返してきた時間の中で、あの青年は何か光る物があるやもしれんと。

少ししてエセルドレーダが余に問いかける。

「マスター、質問しても良いでしょうか？」

「構わん、申してみよ」

申しにくいような困り顔をしながらも余に問いかけた。

「マスターの後ろにある袋は如何いたしましょう?」

余の後ろに浮かぶ食べ物袋が詰め込んだ袋があった。

.....

急に視界が暗くなると、目の前に二人の兄妹がそこにいた。それも美少女と美男子である……神は居ないのか!?

別にイケメンじゃなくてもやっていける筈だ。そうだ、普通で何が悪い? 全てに置いて中途半端な普通な自分がイケメンに……イケメンに……

心の中で死闘し、落ち着いた頃イケメンお兄さんは此方に何か問いかけていたようだ。早く答えないといけないしあのイケメンお兄さん。絶対キレてるように見える。だって、妹さん怯えて黙ってるんだもん!!

早く答えなければいけない。だけど、此処で一つ疑問が残る。そう買い物をしたハンバーグと白米だ。

「ふむ、ハンバーグと申すか?」

つい口からハンバーグと言ってしまったけど大丈夫だよな?。それがイケメンお兄さんの質問回答になっちゃたけど。どんな質問してたかは分からない、でもそのハン

バーグは夕食に出すだけで別に：

「……フツ」

イケメンお兄さんは鼻で笑い、妹さんは必死に笑いを堪えている。

そこまでハンバーグを馬鹿にしなくても良いでしょうに!?

ハンバーグって実はマイナーで食べる方が可笑しかったのかな!?

それとも、常識が間違いだったのか：それを兄妹に問えない自分って。

悶々と自分自答する中、イケメンお兄さんから一つ問いが掛けられると同時に光に包まれた。

「ハンバーグよ、貴様にとって戦いとは何だ？」

次に目を開けると自分が知る街中ではないが、いかにも悪そうな巨大なロボット一体に、複数のロボット達が戦っているがダメージを受けているように見えない。……戦況はよろしくないみたい。

「此処は……それにアレは一体？とにかく、今は避難しないと……なっ!？」

避難行動しようとする矢先に見えてしまった。建物の壁を蹴りながら敵の攻撃を避ける白い巨人がいた。

「あの時の白い巨人!? だとしたらジョーイや博士達が戦っているのか?」

でも、もしそうなら尚更俺が行くと邪魔になるよね…。一応機体はあっても借り物を傷つける訳だし。それ以前に技術もセンスもメンタルも無い俺にはどうしようもない。戦況は随時変わる中、俺は安全な場所を探しつつも戦いを見守るしかなかった。

しかし、世界はどうも…拗れるのが好きらしい。

.....

同時刻、戦場は激しさを増していた。

九郎達は圧倒的なチカラを持つマスターテリオンが乗るリベル・レギスに対して、自分戦いが出来る最大限に使い仕掛けるも、まるで子供を相手にしているかの様に弄んでいた。

そこに加え、興が削がれたマスターテリオンは重力結界を展開し、この場の者達は重力波に呑み込まれる。機体も戦艦もダメージが蓄積され危機的状況になったその時、伝説の忍びが現れる。

「む!? これは…!?!」

伝説の忍び…飛影。この場に来る前、ロミナ達を助けてくれた忍びは再び現れ、縦横無尽に飛び廻りリベル・レギスに攻撃する。

「九郎、今こそが、千載一遇のチャンスだ!あのロボットが

奴を食い止めているスキに…!」

一瞬の隙に九郎・アルが乗るデモンベインは、忍びと共にリベル・レギスに攻撃を仕掛ける。怒りを一撃に込めながら…

「この…クソ野郎がああッ!」

飛影の攻撃で身動きがとれない間に、デモンベインのアランティス・ストライクを放つ。…つまりはラ○ダーキックですね。

「ほう…見事だ!」

デモンベインの一撃により重力結界は解ける。しかし、まだ終わりではない。

「フッフ、良いぞ。虚空よりの使者の助けがあったとはいえ、よくぞここまで余に詰め寄った」

「この気迫に免じて、今日のところは…:~:といきたいが、余もまだやることがある。その為に今一度!!」

再び重力結界を展開するマスターテリオン。それを解呪を試みようとするも…

「またコレかよ!!それに何かが違う…:~:一体なんだ?」

「くっ、九郎!!」

重力結界のはずなのに自分達の操作は効かず機体は動けなくなつた。そして、動けなくなるの飛影は動かず何かを待っているように静観している。

「…さあ舞台は整つた。余を再び楽しませてくれ!」

マスターテリオンの声と共に、空の彼方から蒼閃光が送り辺りは蒼白く染まる。光が収まると、リベル・レギスの前にこの場に居なかつた人型の機体が立っていた。

「あれは何処かで…」

「マスターテリオンは知っていたのか…それとも俺達の窮地に現れた…のか。どっちにしてもお前が頼りだ…蒼き翼！」

竜宮島から行方知らずの蒼き翼、再び彼らの前に現れた。これは運命か、それとも気紛れか？それは果たして…

（あの妹さんに怒鳴られたんだけど…俺って出る必要あるのかな？）

マジカライズ・イーグル

ジョーイ達が戦闘を繰り広げる中、俺は街中を走りまわっていた。理由は色々であるけど、取り敢えず……

「なんで買いい物袋が無いの!？」

一日の締め、有意義な楽しみが詰まった御馳走が、いつの間か消えていた件について。このまま、見つからずに帰ったらご飯抜きになってしまう。それに、博士は言っていたんだ……

「白米か……カズマの料理、楽しみにしてるよ?」

そう、笑顔で言ってくれた。だからこそ、見つけないといけない……戦いが出来ない自分が出来る最大の恩返しだから。

走る中、俺は戦場の中で食材を探す時点で可笑しいと、頭の中で自負していた。けれど、それしか出来ない自分がある。

昔、スパロボブレイした時は、色々と一般市民・報道陣・政府がいた。守ってくれた筈のスーパーロボットとパイロットに対して、陰険に差別的にやる人もいれば、感謝する人もいた。勿論、今の自分みたいに戦場の邪魔をしてしまう人になってしまいかもし

れない。

報道陣もそうだ。自分が本来いる世界と大差なく、真実も偽りも沢山ある。けれど、一生懸命に真実を突き止めようとする人はいる。

政府は……スパロボの中で見ると、情けないくらいにやられ気味で敵に操作される流れがある。でも、それはあまり大差無いのかもしれない。

そんな人達に対して、失礼ながら邪険する自分が何処かにいた。それは単純だったのかもしれないし、難しく考えすぎなのかもしれない。もしかしたら、そんな社会情勢が……周りが嫌だったのかもな。

走りながら色々と考えに浸っていると、突如として大きな地響きと共に周りの建物や空の色がなくなっていく、まるで白黒のデッサンされたような街並みに変わっていた。そんな状況に走る訳にもいかず、只々俺は立ち尽くすしかなかった。

「まだ、迷い続け、力を封じ続けますか？」

「!？」

急に聞こえた声に、驚きつつも何処か聞き覚えのあるような気がした。でも、それはこの際どうでもいい……

「迷うことが……いけないのかよ」

謎の声が言った「迷い」のワードに対して反論する。紛れもない俺の心の叫びであり、戦いと平穏の間で迷い続ける自分に対して：

「迷いは何に置いても邪魔でしかありません。それは気を狂わせ、生を死に猶予い、真理を閉すものです」

頭に響くような声は、優しくもあつたが冷め切つたような物言いだ。本来なら俺なら黙りを決め込む筈なのに、何でか何時もより言葉が口から出てくる。まるで、博士と話しているような……

「そうかもしれない。でもな、だからこそ迷うことに意味がある筈なんだ」

「……………」

「今は分からない事だらけだ。だからこそ、一つ一つ選択するしかないと思うんだ。

それじゃあ……ダメかな？」

目に見えない声に対して自分の絞り出した答えを言う。だけど、相手の声は何も言わず静寂が続く。何分経つたかも定かかない中、声は再度頭に響く。

「直ぐそこに戦いが待ち構えています。貴方の敗北への道が……それでも、貴方は迷いながらも力を持ち続けますか？」

「…それが今の俺の在り方だから。あのイケメンお兄さんに言われた質問も、まだ答えが分からない。分からない事だらけだなあ……はは」

「今の在り方。日々変化する中で、貴方が何処まで行けるか…彼方から…また…」
声が届いていくと同時に、周りの建物や空が色を取り戻していく。あの声は何者なのか…なんで俺に話しかけてきたのか。自分が知る人で決定的にコレだと思える人は誰一人もいなかった。

周りは元の地響き前に戻り、取り敢えず俺は行動を起こそうとすると、突如背後から強烈な視線を感じたので急いで振り向くと…

「えっと…」

振り向くと、両腕を腰にやって偉そうにいるこのゴスロリ少女。何処かで会ったような気がするんだよな。

「エセルドレーダ、ハンバーグ 覚えましたか？」

取り敢えず彼女の名前はエセルドレーダと、言うらしい。でも急に言われてもな…
それに何故ハンバーグ？

（あのイケメンお兄さんにいた妹さんじゃないのか!?)

「妹さんじゃ…ダメデスカ？」

「ハンバーグ、貴方はマスターにも劣る劣等であり、食べ物です。それと貴方の妹ではなくエセルドレーダ と言います」

「あの…」

「貴方は全世界ハンバーグ連盟代表ハンバーグ・イン・ハンバーグです。次回からそう答えて下さい、良いですね？」

俺には拒否権は無いらしい…。それに全世界ハンバーグ連盟代表って、名前つぽくハンバーグ・イン・ハンバーグって。

あの時、イケメンお兄さんが言った質問を誤って回答したから、名前がとんでもない事になってしまった。

(これが、絶望なのか……)

精神にズキズキと刻み込まれた俺は、啞然と立ち尽くしてしまう。二人の間に静寂が広がるが、咳払いが聞こえ意識を向ける。

「マスターからの戯けはそこまでにして、本題に入ります。良いですか…カズマ？」

このゴスロリ妹さんは、あのイケメンお兄さんの命令でやっていたらしい。

(でも、凄く楽しそうにやっていたような気が…でも、だったら何で名前知ってるんだろ…?)

「何で名前を？」

「それは偉大なるマスターの力を使えば知るの簡単です。貴方の名前が可笑しいのは明白ですから」

マスター、あのイケメンお兄さんがご主人様になるんだよね？ 兄妹で主人とゴスロリメイドになったと？

特別な兄妹ならフツウだねえ…そう普通だとも。だけど、何か隠れている可能性がある筈…

「で、実際は？」

「……マスターの背後に買い物袋がありまして、レシートに貴方の名前がありました。それまで、ハンバーグだと信じてました」

カマかけたら素直に答えてくれた。ありがとう、ゴスロリ妹さん!!、ありがとう、エセルドレーダ様!!

おかげで名前が直ると同時に袋があつた情報を得られたと…

「あの、その袋は今何処にあるか知ってる？」

「袋の中身は無事です。しかし、交換条件が一つあります」

彼女からの提案、物凄く嫌な予感しかない……けど、おかずの為、笑顔の為に頑張ります!!

(見ていてくれ、博士!! 俺は今、鷹から鷲になる!?)

結果的に話す、あの悪そうな巨大ロボットと戦うことになった……どうしてこうな

るのかな？ 勿論、買い物袋はまだ帰ってない、マスターが満足すれば返してくれると思うのだが……

でも、エセルドレーダ様は約束を守ってくれてくれるいい子だと思う。まあ、あれも演技だったら役者さんもビックリだよな。

周りを見渡して大きな声で叫んだ。あの時から呼んでないので確証はない。来るかどうか分からない機体に、不安と恥じらいつつ叫んだ……

「ヴァルホーク!!」

名前を呼んだ瞬間、空から何かが来るような気がした。物凄く早くやって来るのが分かったものの、あの速さで来たら此方がやばいので近くにある建物の影に潜むことにした。

ヴァルホークは自分が呼んだ場所に的確に来るみたいだ……到着までに一分くらいだと思えば凄まじいと思う。到着する際、スピードを緩めてくれる安心設計に嬉しきしかない。

ヴァルホークに搭乗と同時にコックピットのハッチは閉まる。すると……

「高エネルギー反応あり、戦闘回避率低下中、搭乗者・カズマ 選択を求める」

機械音声が室内響き、俺の進言を待っているみたい。逃げたいのは沢山だけど、今だ

けは……

「…戦闘地域、高エネルギー体に対して、戦闘開始する!!」

「了解。離陸後、高エネルギー体に接近します。後、飛行モードからロボット形態に移行します」

聴き慣れない単語が聞こえながらも、機体は空を飛び始めた。空から見ると街が被害が思った以上に出ており、地上との差が大きい。

それに、周りのロボットが動いてないのが何か違和感を感じる。

「戦闘開始後、搭乗者操作に任せます。尚、最低限のサポートしますので、自身のテクニクを磨いて下さいませ」

前回同様、サポートはあるものの基本的には俺次第か。マニュアルは博士の家でやっていた。けれど、戦闘練習も経験もほぼ無いに等しい。

（「主人公みたいには上手くないかなだろうな。アレはダンクーガといった、味方がいたことやサポートがあったから。でも、俺は孤立無援の初心者……」

「突入します。対シヨックを構えて下さい」

不安に駆られながらも、俺は悪そうな……ラスボスにしか見えない敵に立ち向かうのだった。

.....

マスターテリオンと蒼き翼の戦いは激しさを増していく。周りの建物は崩壊し被害が増すばかり。

(しかし、どちらも本気を出していないように見えるが、アレは…)

「蒼き翼が押されているな」

「少佐、どうにか援護出来ませんか？ あのままではやられてしまいます!!」

「ああ…だが、俺たちも周りの奴も動けない。この呪縛を解けるとしたら…」

俺は近くにいるデモンベインに視線を向ける。この魔術を解く為には俺達より専門家の方が得意なのは明白。

「おい、まだ動けないのかよ!? アイツは、俺達を助けに来てくれたんだぞ!!」

「分かっておる!!? しかし、まだ解呪するには時間が必要じゃ…」

…あの様子だと厳しいか。ならば、伝説の忍はどうだろうか？ マスターテリオンを翻弄させ、動きを止めた忍ならばどうか…

「姫!? 艦の損傷が高まっています、即刻離脱準備を!!」

「しかし、離脱してもこのままで姫も我々も…」

（何故、伝説の忍は動かないのですか？ 今戦っている蒼き機体、それに何かあるのでしょうか？）

「くそつ、くそつ!! 何で動いてくんねえーんだよ!？」

「ア、アニキ。落ち着いてくれよ…」

「落ち着けるか!! このままじゃあ、俺達もアイツも終わっちゃう。レニー、どうにかならねえか!？」

「わ、分かんないわよ…この目に見えないもので、私達の機体も戦艦も身動きがとれないわ。このままじゃ…」

皆、この状況をどうにかしようとしている。だが、どうも女神様は試練を与えたいみたいだな…

「…ヘル・ストリンガーの準備だ」

「少佐、それはいけません!! アレは少佐の身体に負担がデカすぎます!!」

「分かっている。でもな、アレならば空間を通って、奴に一撃を与えられる。そうすれば、この呪縛は解けるさ…」

サヤには辛いばかりを掛けてしまうが、今思い付く限りはこれしかない

「…分かりました。でも、了承はしません。少佐が望んだ手段は最終手段です。蒼き翼が負ければ、すぐさま了承します」

「サヤ…お前は……」

「どうやら、俺は娘に嫌われてるみたいだ。俺だけではなく蒼き翼も。サヤは知らない、アレは……」

……………

「どうした蒼き翼よ、余を満足させよ」

あの声は、間違いなくイケメンお兄さんだよな。あの子に誘われたんだからこう…なるよな。

でも、予想通りというべきか…

「攻撃が全然当たらない…くっ!」

「損傷率48%、エネルギー率61%減少、総弾丸数15発。離脱も検討されたし」

状況は悪くなる一方か。どうにか一撃でも与えられれば、まだ活路は見出せる……そんな気がする。でも、一撃で葬るような武装?

「武装検索 何か大きなダメージ与えられる武装はあるか!？」

戦闘中に呑気に検索出来ないので、機械に任すしかない。記憶の片隅にあった筈だ。

「少し早いが余興はここまでにしよう。貴公に洗礼を渡そう、エセルドレーダ」

「イエス、マスター……」

敵のロボットが急に止まると、目の前に魔法陣が展開される。それを見た瞬間、身体中から汗が吹き出し寒気を感じる。

（アレはヤバイ……ヤバすぎる……どうにかしないと!? でも、どうやって!!）

逆転の一手も見つからず、敵の特大魔法が目の前で発動する。その力を前に、戦意喪失な俺に朗報が飛び掛かる。

「武装あり、しかし相手の動きを止めなければ意味がありません」

機械からの武装情報が入るが、内容からして命中率は低いみたいだ。だけど、今相手は攻撃の準備で止まっている……今しかチャンスはないのは明白だ。だけど、今相手

「全エネルギーを蓄積させる。その武装に全てをかけるんだ!!」

「……了解、パワージェネレーターフル稼働。リミット一時解放、武器解放」

（……超えてやる、死に近い山を）

.....

勝負は決しようとしていた。どちらも大きな力を高め始め、俺達や周りの建物に気にしていない。

リベル・レギスは魔法陣を展開し何かを準備している。蒼き翼は、両腕を前に突き出しエネルギーを集め始める。蒼白い小さな玉は大きくなり、その玉の大きさは成長を止めず機体を呑み込む勢いだ。周囲は雷が怒涛に落ち、神の怒りが満ちているように錯覚してしまう。

「双方の力が衝突したならば、タダでは済まない……」

周りの皆、分かっている……いや、分かっている。この肌に伝わる感覚が、神経を通して全身に伝わっていく。寒さを通り越して、死が具現化したような旋律が……

(一体どうする!? 片方でも、止めれば良いが……ヘル・ストリンガーでも無理に近い) 力の衝突を見守るしかない俺達は……ここまで……

「聞こえるぞ!! 魂の叫びが!! 眠りし意志が!!」

「!?」

何処からともなく聞こえた声に、一同は驚く。だが、それだけではなかった。

「魂イイイイイ!!! 暴風激烈斬!!!」

蒼き翼とマスターテリオンとの間に、突如として三つの竜巻が生まれる。三つの連

なった竜巻達は、マスターテリオンに襲い掛かると同時に、それが分かっていたかのように蒼き翼も竜巻達に続く。

「これが……プラズマエクスキュージョンだ!!」

蒼き翼から放たれた蒼白い特大の玉は、一直線にいき町の一部を削りながらマスターテリオンがいる場所に向かって突き進み彼を呑み込んだ。

「今日はここまでにしよう。蒼き翼よ、その力を高め、更なる境地に進むが良い!!」

その瞬間、特大の爆発と強烈な白い閃光が起き、周囲は爆風によって吹き飛ばされる。爆風が収まり辺りが見えるようになる。だが、違和感がそこに広がっていた。

「何故……元通りなんだ?」

アレだけの激闘があつた場所は、事件前と同じ状態に戻っていた。いや、途中までの戦いの傷は残っていた。それは、蒼き翼が介入する前の状態で。

そして、周りには幾つもの機体や戦艦はいたが、伝説の忍・蒼き翼・謎の声を発する存在は、もういなかった。

「少佐、コレは一体?」

「分からないが、マスターテリオンが再度やった重力結界が原因かもしれないな。あの瞬間から、アイツのテリトリーで戦っていた……のかもしれない」

「それは……ありえるのでしょうか?」

「…さあな、それは分からない。憶測でしかないからな」

だが、もしそうならマスターテリオンは化け物じみた存在だと認めたことになる。厄介しかないな…

「蒼き翼と、あの声は何だったのでしょうか？」

「蒼き翼は、また何処で出会えるはずだ…そんな気がする。声は知らん」

「……良いんですか？」

「ああ……」

あの声の正体は分からない。だが、あの竜巻を起こしマスターテリオンの動きを止めた……相当な力だろう。

俺は選択しなければいけない。蒼き翼と共に歩む道を、その先にある輪廻に対抗する為に……だが、

(まずは、助けた連邦兵をどうするか…だな)

まだまだ問題が積もる中、俺はサヤと共に彼らの元に行った。

……

「……っ!!」

目を覚ますと同時に身体に鈍い痛みが走る。周りを見渡すと、瓦礫が散乱し薄暗かったが、自分はベットに寝かされていたようだ。それに身体中に、包帯が幾つもの巻かれており一部の包帯は赤く染まっている。

(何処かの古い建物内にいるようだけど、俺は……)

「あ……ああアアアアアア!!!」

先程までの死闘が脳内にフラッシュバックし、身体中に寒気さと恐怖に襲われ俺は悲鳴に似た叫びをしてしまう。

(俺は……生きて……る? のか?)

先程と今とでは状況が全然違く、何も分からなくなっていた。生きてる実感が湧かず、近くにある火のついた口ウソクを呆然と眺める。すると……

「貴様は生きている……分からんか?」

暗闇から声が聞こえ、声ができる方向に視線を向ける。薄暗い中、此方に近寄ってくる……

「ヨ……ヨロイ……鎧武者!」

そこには、亡霊がいた……?

魂の鎧武者と傷だらけの鷹

目を覚ますと瓦礫が散乱した薄暗い室内、ロウソク一本で照らされた部屋で俺と鎧武者は対面していた…

「生きて……る？　本当に？」

「……」

鎧武者が言った言葉に反応するも、此方からの話には返答はなく沈黙を貫いている。でもそれは、肯定……しているんだと思う。何となく雰囲気と感覚が「死ではなく生」と、言っているように幻聴が聞こえる。

「生き残れたんだな、俺……」

上を見上げ、天井を見つめるが暗いので分からない。でも、生き残れた実感と、終わったことによる安心感に心は満たされていく。

「フン、貴様が生存者ならば周囲にいた奴等もまた同じ事。それは紛れもない事実だ」

鎧武者は言う。自分だけじゃなく、周囲にいた人達も生き残ったと。激戦の中、機体や戦艦が動けないように見えたから不安に感じてはいたが、あの時の自身にはそんな余裕はなかった。

（そっか…：ジョーイや博士、皆無事だったんだ。良かった）

「ただ、その安心感は鎧武者の次の一言で全て吹き飛ぶ事になった。

「貴様は何か勘違いをしているな。先の戦いなど序章に過ぎん、これからが世界が大きく分岐を迎える事だろう」

「っ!? そ、それは…：どういう…」

あの戦いが序章だとしたらプロローグみたいな扱いになる。イケメンお兄さんが乗ったロボットは、確かに本気は見せてないかもしれない。でも、俺は…：オレは…：…

「…：…：…」

「何も言えんか？ 本当の戦いを知り、己の弱みが浮き彫りとなった今、貴様はどうする？」

鎧武者の言った言葉は、全て事実だと断言出来る自分が何処かにいた。今まで俺は、戦いを…：ゲームという画面の向こうでしか知らなかった。実際、戦争や戦乱といった時代を俺は生きていないし、戦いとは遙か彼方に置いた平和の中で生きていた。戦争はまだ、実際に体験した老人から聞いてはいたし映画は幾つもの作品を見た。体験が出来ると思ったらゲームでしか体感するしかない。

「ただ、今回戦いを経験して思い知った…：痛感させられた。

次に、対策をちゃんとしてなかったのも原因がある。ゲームの知識と経験ならどうに

かなると戦闘訓練（シミュレーター）をしてなくて、ただマニュアル本を読んだだけの素人が希望的達観を決め込んでしまった。

これら全てが、俺の弱みとなってしまった。今回は、まだ結果的には良かったかもしれない……でも、最もやり方や経験があれば状況が変わったかもしれないし、他にもあったかもしれない。結局、後悔しても過去は変わることはない。

「このまま逃げるか？ あの孫権と同じように逃げ、迷いも覚悟も戦いも全てを否定するか？ 貴様は……どうする？」

鎧武者は俺の心を追い詰めていく。あの戦いの直前に聞こえた謎の声も今と同じように問い掛けをしていた。

「迷い」と「戦い」。どちらも違うけど、考えてみるとどちらも今回の件に繋がっている。二つの問いの最善な答え……それは……

「……逃げない。覚悟はあるかは分からない、でも戦いの中で迷い続けなれないいなんだ。そこに答えがあると信じてるから……」

「……………」

あの声と鎧武者の問い、そこから今出せる回答をするが俺自身は間違っていないと思える。黙ったままな鎧武者は、俺から視線を外し背中を向けて暗闇の中に行こうとする。呆れてしまったのか、それとも期待外れだったのかは定かじやない。でも、今言わない

といけない言葉がある……

「あ……ありがとう……包帯……してくれて。それから、俺の名前……カズマ……」

一度は立ち止まるが、振り返ることなく暗闇に消えていった……

（あの人は、もしかしたら俺を心配してくれたのかな？ だから、敢えて厳しく言ってくれたのかも……）

鎧武者には聞きたいことは沢山ある……あるけど、取り敢えず眠ることにした。話に集中していた影響か痛みがまた広がり始めたのもあるし、この薄暗い場所で変に移動して迷ったら迷惑しかない。今はご厚意に甘えよう……悪い人ではないと、思え……た……か……ら……

……

夜空に映る星々が輝き辺の草や木、動物達を静かに照らす。

静けさの中、岩の上に座り瞑想をする先程の鎧武者がいる。そこに、白く煌く者が近づく。その周りには蝶々達が飛び舞いを舞っているように……

「奉先、あの者は良いのか？」

「……天は奴を欲した、それに俺は応えた。それで良い」

「だが、それは奉先がやらなくとも、あの時周りには何人も力を有した者がいた筈だ。出る必要など……」

白く焔く者は鎧武者に問う。助けた事に対して意味はあったのか、出る必要があったのかを。自分が知る者が、何故こうしたのかを知る為に……

「奴には力が……カズマには武器があつた。だが、やり方の知らぬ者では宝の持ち腐れでしかない。周囲にいた奴等も、また同じこと……」

「……」

「しかし、ならば何故看病をし奴に問つたのだ？」

「……カズマもまた、漢になる……その為だ。だが、まだその時ではない」

やはり、変わらない。漢とは、曹操・劉備・孫権など認められた相手を指す言葉であり、自分にとって立ち塞がる脅威でもある。だが、強大になる程に戦いの中で奉先の魂が昂り天へ近づく。

今はまだだが、近い将来私や奉先と敵対し越すかもしれんが、期待するのはあまりない。

「……分かつた。奴の方は奉先に任せると報告もある。加藤機関が動きを開始した」

「……」

月に照らされた二人は、空を見上げこれから先を見定める。加藤機関とカズマ、それから先々に出逢うだろう者達にどうするべきか。いや、それは関係ないかもしれない。どんな状況になろうとも、変わらないものがあり成すべき事は分かっているのだから。

.....

あれから二週間程度が経過した。日数は曖昧で相変わらず薄暗い部屋だけど、今は朝方なのでヒビが入った窓から日差しが差し込む。何の不自由なく生活しているけど、人間誰しも慣れれば住めば都ということだろう。ただ、未だに博士やジョーイ達には連絡してないから心配していると思うと申し訳なく感じてしまう。

怪我はだいぶ治ったが、激しく動くときまだ鈍い痛みが傷跡から出てしまうので万全ではない。

「…呂布、料理出来たよ」

只今居候中の俺は、何か出来ないか呂布に聞いたら料理をすれば良いと言われた。因みに名前については、怪我を負ったあの日の夜。急に叩き起こされると、名前だけを言つてまた暗闇の中に行つてしまったんだ。眠気と疲れであまり記憶にない…けどね。次の日、さん付けしたら断られたので仕方なく呼び捨てにしている。

さて朝食なので、目玉焼きとハムとパンを人数分準備して丸テーブルに置く。夜だと丸テーブルの中央にロウソクを立てて食事をしているが、基本的にその時は一人なので寂しい食事だ。

「……いただきます」

「……」

静かな呂布と食事。本当ならもう一人いる筈だけど、あの人は一回会っただけで話も何もしていない。呂布に聞いても何も答えないのでお手上げの状態、結局毎朝は呂布と食事をしているけど嫌ではない。

「……行くぞ、カズマ」

「分かった」

食事を終えた俺は、食器を洗い場に置き運動靴に履き替えて外に出る。出た先には、既に準備を済ました呂布が立ったまま目を閉じ瞑想している。呂布は両手に木刀を持ち下段の構えのまま、俺は自分が使う一本の木刀を手に取り中段の構えをする。

（怪我した次の日から、この呂布との修行。未だに一太刀も与えてないし、勝てるイメージも沸かない）

この修行は、俺から呂布に頼んだ事だ。無力な自分には、頼める人が居ない。博士やジョーイは難しいし……後は知人が殆どいない。

だからこそ、目の前にこの人に申し込んだ。世界の歴史の勉強にて、三国志に度々出てくる名前と同じ「呂布 奉先」という最強・無双と言われた者と同じ名を持つていたから。これは俺のイメージでしかないかもしれないけど…。

勿論、断られると思っではいた…昨日の出来事があった後で、まだ怪我也完治していない状態。他にも、至らない点は幾つでも出てキリがない。

しかし、結果は今に至っている。何故了承したのか聞いたけど、毎度の黙秘なのでスルーするしかない。修行に付き合ってもらうだけ感謝しかない。

『……………』

両者は沈黙のまま、木刀のぶつかり合う音が響き渡る。呂布は二刀を軽々扱い隙を見せないよう攻撃を次々と仕掛けてくる。対して防戦一方になっているが、どうにか一瞬の隙を見つけて攻撃に転じるが容易く防がれてしまう。

（これでも駄目か。でも、動きはなんとか目で追えるなら…）

呂布はこの修行に二つヒントを言っていた。

へ一つ目、どんな小動物だろうと動きを見極めれば対処は出来るゝ

「でやああああ!!」

大声を出し呂布に急接近する。急接近した俺に対して呂布は一瞬だけ行動を止めた瞬間、俺は右足を上げ呂布の左手にあった木刀を蹴り飛ばし、勢いのまま左回転をして

自分の左手にある木刀を振る。

しかし、呂布は残った右手にある木刀で防がれてしまう。だか勢いは残ったまま……

「はあああああ!!」

勢いのまま右腕の拳で相手の顔を殴った。殴られた呂布は、身体を蹠踉めき膝を地面につける。

△二つめ、武器は手持ちだけに拘ってはいけない。多種多様にある武具があるが、状況に対応出来なければ持ち腐れでしかない△

「つつつつ!!」

しかし、呂布は鎧を身に付けているので顔もまた然り。つまりは、素手の右手が物凄く痛い……めっちゃ痛い……

「ふふふ……ははハハハ!! 良いぞ、カズマ!! 刀ではなく貴様の拳で決めたか!!」

俺の感動よりも呂布の昂りは凄いと二度目ながら思う。最初は夜に突然に叫びまして……

「遂に繋がりが始まり、天に響く声が広まるか………魂イイイイ!!」

と、叫んでいたから初めは驚きと呂布の普段との差に唾然としたのは良い思い出だと思おう。

それに二つ目のヒントからこうなったけど……

「太刀じゃなくて、一撃で……？」

「どちらも同じ事よ、俺の魂が荒ぶり震えてくるぞ……だが、この続きは今ではない。カズマ、今から行くべき場所に向かえ」

呂布の昂りは急に鎮まり、俺に行くべき場所があると言う。でも、行くべき場所って一体何処に？もしかして、博士の所とかかな？

「貴様が乗る機械が示す筈だ。今、呼び出すのだ」

予想とは違い、ヴァルホークを呼ぶよう促される。

「でも……アレは。それに呂布は……？」

そう、先の戦いで俺がこうなりヴァルホークも同じく損傷している。この間に直るにしても、ナノマシン（再生力）がないヴァルホークじゃあ無理だ。それに、呂布には恩返しの一つも出来てない……

「……奇怪な顔をするな。貴様は自身の成すべき事に集中し、然すれば廻って俺に意味を成すだろう」

呂布の目は真つ直ぐ俺を見つめ、何時もとは違い声に温かみと柔らかさを感じた。遙か高みにいる呂布からとは思えない姿だが、これは俺しか知らない……いや、あの人も知ってるのかな？

（成すべき事……やるべき事……行ってみるしかない）

「ヴァルホーク、来い!!」

俺の言葉と共に、空から風圧と機械音がする。そこには修復されたヴァルホークが飛んでおり、ゆっくりと後下し着陸した機体は直ぐにハッチが開いた。

「……またね」

機体に向かう前、別れ際に再開があるように言葉を言う。呂布は無言のまま見つめるだけだ。

ヴァルホーク搭乗後、ハッチは閉まり機体は空に飛び始める。呂布とボロい建物が小さくなり周りが見えてくる。

「孤島……だったんだ」

外に出ても修行で探索しなかったけど、まさか孤島だったとは…

「行き先、固定しました。デルタポイントに指定。時空間の歪みから侵入し目的地に入ります、総時間は一時間」

機械音声から行き先を告げる。

呂布の言った通りになったが、デルタポイントに何かがあるようだ。ならば、一時間の猶予もあるのでシミュレーターを使うことにした。前回のオチを繰り返したら呂布の修行が意味をなくしてしまうからね。

それから一言、心で言うておこう…

(博士、ジョーイ……まだまだ帰れなくて ゴメン)

.....

俺は奴が飛び立った後、いなくなった空を見上げる。

「.....くくく」

笑いが込み上げてくる。この俺が、この呂布が弟子を作るなど誰が予想するだろうか？ 俺も予期しなかったが、作った事に対して嫌な気はしない。

(俺に情があったと？ 笑わせる!! これは更なる高みの為の精でしかない)

だが、一興が出来たのは良い。後は何処まで登り詰め、俺の魂を昂りさせてくれるか..... 何かが来る、これは.....

「.....総司令が来るとはな？」

「奴がそうなのか？」

「.....」

.....

「そのオーラマシンは何じゃ!! 貴様はサコミズと繋がっておるのか!?!?」

(行き着いた先で、お爺ちゃんにカツアゲされています……誰か助けて)

答えぬのか

訓練と新天地と絡まれの鷹

現在、お爺ちゃんにカツアゲされてはいるが、これになった経緯を追っておこう：

呂布に介護と修行をしてもらった俺は、ヴァルホークに乗り言われた場所に向かっていた。だが、到着する時間まで空きがあったので今まで使ってなかったシユミレーターを起動することにした。

「シユミレーター 起動確認中。データファイル及びバーチャルシステムの再確認中……」

システムの起動まで、マニュアル本に書かれた説明と頭の記憶とで間違っていないか確認をしていく。何十回も同じのを見るが変わってる部分もなく自分の知る通りに書かれていた。

（間違いはない……後は自分の力量次第か。あの人に来てくれたから今があつて、次も同じように上手くはいかないんだ）

自分を見つめ直し、過去の失態を繰り返し返さないよう心に決める。俺が少しでも強くなり、機体と自身がいる理由を知る必要があるのだから。そこにアナウンスが入る……

「各システム オンライン。 戦闘プログラムを起動前に、難易度全二十段階からパイロットに合わせて調整に入ります…」

シミュレーターや軍事練習はあまり分らないが、パイロットに合わせる為に多段の難易度があるとは知らなかった。ゲームの画面で、文章でパイロット達が訓練をしているのは知ってはいたが詳しくは分からなかった。

……まあ、今の自分では最低クラスの自負があるので難易度一くらいが丁度良い筈だ。

「難易度三に設定 バーチャルシステム起動 開始」

(な……さ、三!? でも、二十段階だからまだ大丈夫……だ)

予想よりも高く設定された事に、内心驚きながらも心を落ち着かせ平静を保とうとする。プログラムが展開されると周りの風景が変わっていく。真っ黒な空が広がり、離れた場所に地球と月が見える。

「……凄い」

今、人生で初めての宇宙旅行をしているかのように錯覚をしてしまう。シミュレーターによる擬似ではあるが、どれも本当にあるようで行けば直ぐに届きそうと思ってしまう。

(人類が宇宙に出て、地球に対して色んな名台詞が生まれたのも分かるな……)

そんな時、機内の画面が赤く点灯しアラートが鳴り響く。

「これより戦闘訓練に入りますが注意点を。訓練中は画面下に表示された体力ゲージには注意して下さい。体力ゲージがなくなれば戦闘強制終了しますが、その前に条件を満たせばクリアになります」

説明に合わせ画面下に体力ゲージが表示される。今はまだ満タンなので緑色のゲージになっている。条件については分からないが、今のスペックで何処までやり対処できるのか不安もある。しかし、過去より今の自分の方が自信を感じるのもまた然り。左右のレバーを握り締め、ペダルや各システムのスイッチ場所を見返す。

そして、モニターに映る対戦相手を見ると……

「っ!? ウソ…:…:だろ?」

(何でイクサーがいるの!?! 初心者殺しにも程度というのがあるでしょ!?! それに三人もいるなんて…)

目の前に現れたのは、イクサー1・2・3の三人の女性戦士達が宙に浮いていおり此方待ち構えている。イクサーはしに参戦し、ロボットに乗らずに戦うことが出来る人達だ。勿論、ロボットに乗ればサブパイロットが乗るので精神コマンドも多彩で使い易

い。

だが、乗らない方が強いよね……と、周囲に言われがちだ。

「私達が何故此処にいるのかは今言えませんが、これから幾多の戦いが待っているでしょう。その為に思い出さなければいけません」

「貴様には、私達と戦ってもらおう。だが、力やテクニクでの勝利はないと思え」

「ん〜と、私からはヒントを言うね〜。戦いは生死を分ける場所だけど、自分が絶対に失っちゃいけないモノは何かな？ 答えが分かったら……良いことあるかもね？」

イクサー1・2・3の順に画面に映し出され、それぞれの声がスピーカーを通して聞こえてくる。

当時のやっていたゲームでは声はなく、多彩の曲・モーションや演出・（声では出来ない）特殊セリフにストーリーなど、自分にとってそれだけで満足していた。

一部の人は、古さや声無しなど遠目に置かれがちだ。でも、声がないからこそ参戦出来る作品もあって、自分で声当てをし主人公になりきることが出来き感情移入し易かったのだ。

そんな自分は声なんて知らないに等しい筈だ。なのに…

（初めて声を聞いたのに、何で知ってるような懐かしく感じるのだろうか？ でも、どんな形であれ嬉しい気持ちしかないや…）

歓喜になる自分だが、顔には出さず今はその気持ちを抑える。今は彼女達が言う言葉を耳を傾け頭に纏めていく。

此処にいる理由は戦闘訓練だとして、この戦闘は力やテクニク：つまり、武力行使の攻略は不可になるのかな。認められるとしたら、3のヒントが鍵になるけど…

（俺は知っている？ 絶対に失つてはいけないモノ…：思い出さなければいけないこと…）

「っ!?」

静かに考えに浸るが、機体が急激に揺れるのと同時に現実を引き戻される。急いでモニターを見ると体力ゲージの二割が減っていることが分かり。俺は急いで旋回し回避に専念するが相手からの攻撃は止まらない。

（答えを出さないといけないのに!! もし攻撃が出来たとしても回避するだけで精一杯だ…）

イクサー2から放たれビームを避けるが次の瞬間、右からイクサー1のソードで機体に攻撃をし、体力ゲージが削られるのと同時にダメージの衝撃で機体バランスを崩されてしまう。

俺はどうかか体制を立て直そうとするが、1と2の二人が上下左右に動き回り、此方の視野と動きを止められてしまう。そこに機体の背後に空間転移（テレポート）した3

はイクサーボム（高速体当たり）をする。身動きのとれない俺は、機体をロボットに変形をさせ盾で防御するしかなかった。

圧倒的な弾幕と接近戦を交えた彼女達の華麗なコンビネーションの前に、攻撃と衝撃を耐え続けるばかり。前回の戦いから対抗策を練ってはいた。だが、強力な敵一体を想定するばかりに気を取られ、大多数を相手の対抗策が出来ていなかった。

……体力は削りに削られ続け、残りの体力ゲージは少しの赤色が見える程度にしかない。

（は……はは、やっぱり凄いな……イクサーは。 やっぱり、ただの一般人の俺には無理だったのか）

すると、彼女達は動きを急に止めて此方の様子を見ている。何故、攻撃を止めたのか分からなくなるが、そこにアナウンスが鳴り響く……

「ポイントデルタに到着 これより突入シークエンスに入りますので、対シヨックの準備を始めて下さい」

戦闘訓練は終わり、画面と周りの風景が変わり青い空に変わる。空の一部が何か渦を巻いているように見えるが、俺は失望もありつつ気になることがあった。

（結局、何も答えられなかったな……でも、画面が変わる瞬間の彼女達の顔は何だったのだろうか？）

三人共に表情が違っていた。1は真つ直ぐ此方を見つめて微笑んでいた。2は怒っているように表情だったが最後だけ、片目で見つめていたような……。3は指を指して笑ってはいたが、何処か心配しているよう。それぞれが見せた表情は一体……

（俺の見間違いだと思うし、それに相手は戦闘訓練で出されたバーチャルでしかない。アレは本物じゃないんだ……）

「突入開始まで、五、四、三、二、一」

カウントダウンが始まり意識を切り替える。レバーを握り締め前屈みをし対ショックに備える。目の前に映る、あの渦の先に何があるのかを確かめる為に……

「時空間、突入 ヒートエッジエクスプロイダー起動」

ヴァルホークは炎を纏いながら渦の中に入る。中は綺麗な虹色に見えるが、乱気流を起こしており機体は大きく揺れに揺れる。更には機体の速度も上がっているのでG（重力）が増していく。二つの事に意識は朦朧としながらも前だけを見つめる。

（気絶する……わけ……に……）

しかし、己の気持ちとは裏腹に意識を失い気絶してしまう。次に目覚め時には、知らない部屋のベッドに寝かされて、知らないお爺ちゃんが起きたばかりの俺に……

そこまでが経緯になるけど、どうやってお爺ちゃんに説明しよう……

.....

バイストン・ウエル

そこは「海と陸の間にあり、輪廻する魂の休息と修練の地」とされ、オーラ力と呼ばれる生体エネルギーで支えられている。

アマルガンの指示に従い、へべと共に反乱軍本拠地から離れた深い森を搜索していた。普段ならオーラマシンに乗り調査するのだが、正体が分からない以上、目立つオーラマシンは逆に危険と言われ、仕方なく徒歩で歩くのだが森林と深い霧しか見えない……へべ、本当に此処にあるのかよ?」

「正体不明の機影がこの森林に落下したって言う話だが、確かな情報だと思うけどね……もし偽の情報なら私ら反乱軍は終わってるさ。それに、もし仮に罠だったらそれこそオカシイじゃないか?」

「? 何がオカシイんだよ?」

「サコミズ王なら、王都に近い場所か軍が配備し易い場所に誘い込んだ方が確実に反乱軍は壊滅させられるだろ?」
「なのに、この辺境に誰が誘うのさ……」

「ん〜まあ、そうだよな。　はあ……帰りたい……」

「キキ、搜索始めてまだ時間経ってないじゃないか……」

終わりのない森林と深い霧に、嫌気になる私を見てへべは溜息を吐く。本来なら今日は休暇で唯一の自由日なのに、それが謎の落下物のせいで搜索する羽目になった。

（はあ、今日は厄日なんかなく）

深く続く森を突き進んでいくと青い何かが見えたような気がした。ただの幻覚かもしれないが、へべに相談することにした……

「なあ、この先にさ……青い色が見えたんだけど、へべは見えたか？」

「ん？ いや、深い霧でなんとも……キキは見えたんだね？」

「……多分」

半信半疑ながらも、自分が一瞬見えた青い何かがある方向に進んでいく。歩みを進めていくと、そこには見たことのない青いオーラマシンのあった。

「な、なんだこりやー!? 見たことのないオーラマシンだぞ……」

「ああ……こりや凄いいお宝かもしれないが、もしかしたら地上界から流れ着いた物かもしれないね」

「地上界？ つて、ことはよ……サコミズ王の世界はこんな物が沢山あるのかよ!!」

「分かんないけどね。一旦、無人機かどうか確かめる為にもコックピットを探してみているかね……キキは前方部分を、こっちは後方のエンジン部分から探すよ」

へべの指示に従い、私は前方部分に向かう。地上界から来たかもしれない青いオーラマシンは、機械的に作られており一度も見たことがない。サコミズ王が乗ったアレを一回り大きくしたような感じだ。

(下には無さそうだし…登ってみるか)

私は探索範囲を上に向け、何処か登れないか探ってみるが見当たらなかつた。面倒なので無理矢理よじ登り、上へ上へと進んでいくとコックピットらしき透明な部分が見えた。

(へへっ…見つけたぜ、中身は暗くてよく見えないな。　どうやって開けるか…)

開け方が分からず、叩いたり引つ張ったりするが反応一つもない。そんな私を嘲笑うかのように閉じ続ける扉と、今までの道中で溜まった鬱憤を晴らす方法を思い付く。

(思いつきり殴れば壊れるんじゃないか？　そうすりゃ、中身も確認出来るし鬱憤も晴らせるし…：良い事だらけじゃね？)

鍛え抜かれた身体なら、こんな丸見えな板など壊せると何故の自信に満ちていく。もし壊したとしてもアマルガンなら許…：雷一つ落ちそうだ。だが、今晴らさずにいつ晴らすのか。この鬱憤を晴らす為に拳を天に向ける…

(私の…全ての鬱憤を込めた拳を…)

「受けやがれー!!!」

私の全てを込めた拳は当たる……ことはなく、いつの間にかハッチは開いており空振りをする。だが、勢いを失うことのない拳により身体のバランスを崩してしまいコックピット内に入ってしまふ……

「つてー!! 何で開いているんだよ、殴らせろよ!!」

鬱憤を晴らせなかった私は怒りが収まらなかったが、不意に下から何か生暖かい何かを感じ……下を見ると……

(なんで男がいるんだよ!! ……でも、なんで身体中に包帯巻いてんだコイツ? まさか、王都から逃げた脱走兵なのか!?)

もしそうなら、助けなければいけない。同じ志を持った同志なら尚更だ。

「おい、へべ!! コックピットを見つけたぞ!! それから、怪我をしているみたいだ!!」
私は叫んでへべを呼ぶ。呼ばれたへべは、私同様に登る場所が分からずにいたがなんとか登ってくる。登ってきたへべは、コイツの状態を見て察したようだ。

「へべ、コイツを外に出すから手を貸してくれ……」

「分かったよ、でも何で身体中に包帯巻いてんだい?」

「脱走兵かもしんねえーな。あのサコミズ王から逃げて怪我を負い、自分で包帯を巻いたけど気絶したんだろうよ」

「なるほどね、まあどんな事情あれ怪我人を放っておくのは些かね……取り敢えず、二人で担ぐよ」

へべと協力してコイツを担ぎ下に向かう。登りよりも降りの方が難しかったが、凹凸ある部分を渡り下へ降っていく。地面に降りた後、担いだまま一旦森の入り口に戻ることにした。オーラマシンがない私達ではアレを運ぶには不可能であり、今出来るのは怪我人を本拠地に急ぎ運ばなければいけない。

その後、何とか担いだまま本拠地に着いた私達は、入り口の門番に話を通しアマルガンへの方向はへべに任せた。私は急いで空きの一室に向かいベッドに寝かせ後、包帯や治療に必要な物資を借りる為にその場を後にした。

少し時間を有したが、医療機器が集まったので戻ってみると……

「そのオーラマシンは何じゃ!! 貴様はサコミズと繋がってあるのか!?! 答えぬのか!?!」

興奮して冷静を失った老人：アマルガンが怪我人に対し尋問をしていた。しかし、アマルガンが話す内容に違和感がある。

(オーラマシン? アレは森に置いたままだし、それに実際に乗ってる姿は私とへべの二人だけ。取り敢えず、仲裁しますか……)

.....

どうやって説明するか考えていると、知らない女性がお爺ちゃんに話し掛ける。

「証拠はあるのだ!! 早よ……」

「はいはい、お爺ちゃんは早く寝ましようね〜」

「誰がお爺ちゃんじゃ!! キキ、話に割り込むではない?」

二人の掛け声は漫才……いや、親子のように見えた。だが、今はこの人に任せるしかない。自分が話せば火に油を注いでしまいで様子見を続ける。

「少し落ち着けよ……アマルガン、そのオーラマシンって何だよ?」

「何寝ぼけたことを、へべから話は聞いた。森に見た事のない青いオーラマシンがあったと……。そこに王都に潜伏する儂の部下からの情報に、新型の青いオーラマシンが造られたとな」

お爺ちゃんが言いたい事は、自分が乗るヴァルホークとその……おっ、オーラなんちゃらの色が同じだから怪しいと。

(もしかしなくても、此処って軍隊だよね……俺、ヤバイかもしれない)

俺は内心焦っている中、二人の会話は進むんでいく。

「なあ……流石に決め付けるには早すぎだと思っけど。色は同じでも、コイツは王都

から逃げて来たんだぜ？　こんな怪我をして逃げて来たたら、コレは流石に老将アマルガンの名が泣くな？」

喧嘩腰に話をする彼女に、お爺ちゃんの怒りは増していく。：余裕そうな女性と怒り心頭なお爺ちゃんを止められる人は誰もいない。

「…キキ、儂が一声やればタダでは済まないのは分かるじやろ？　なのに、何故儂の発言に異を唱える？」

そこに、お爺ちゃんは軍の力を振りかざす。普通なら恐怖を感じるのだが、彼女は顔を下に向け悲しそうに言う：

「昔、サコミズ王との間で何があったかは聞かないし、最近のゴタゴタに神経質になるのは分かるよ。　けどさ、そんなことをしたら否定したサコミズ王のやり方と同じだよ

……アマルガン」

お爺ちゃんは、ハツとすると何処か気まずそうな顔をする。女性との会話を終え此方に身体を向けると：

「……先々の態度や言動を含め、すまんかった」

「やつぱり、爺さんはこうでなくちやな？　老将アマルガン、復活？」

「茶化すではない!!　キキ、後は任すぞ」

お爺ちゃんは、そう言うのと部屋から出て行った。

来たばかりの俺でも分かる……二人の間に確かな信頼があるのだと。自分の場所は、博士やジョーイに呂布になるが……

(人間関係全然ない……少ないよね)

女性はお爺ちゃんの中を見送った後、此方を見て顔をニカつと笑いながら自己紹介をしてくれた。

「私はキキ・アッテル。アンタの名前は？」

「……カズマ、……ありがとう」

「!! へへっ、言葉足らずな感じだけど、感謝する奴に悪い奴はいないな。よろしくな、カズマ」

「……ああ」

新たな場所 バイストン・ウエルに辿り着いた。この先に一体何があるのだろうか？
……

時間じくして、ある場所にて……

「ジャコバ様、エイサップという聖戦士と共に行けば良いんですね？」

「その通りです。エレボス、任せましたよ？」

小さな少女は、老婆から離れ行った。一人残った老婆は、夜空を見上げて小さく語る

：

「全ての命は巡り、生と死を繰り返す。 想いもまた巡り、小さな希望は大きくなって時間も空間をも万物にすら超えていく」

（数多の可能性が思い出となり、彼が本当に……見極めればいけません。 リーンの輝きが、輪廻が、世界が貴方を求めるのだから）

老婆は姿を消し、残ったのは美しい夜空が広がるだけだった…